

第3回 重症心身障害児（者）関連施設間 情報ネットワーク化 意見交換会

平成25年2月23日（土）13時より、当院大会議室において「第3回重症心身障害児（者）関連施設間 情報ネットワーク化 意見交換会」が開催されました。3回目となる今回は、茨城県立医療大学より岩崎信明先生と佐藤秀郎先生をお招きし、講演をいただきました。

まず、岩崎先生より「重症心身障害児（者）と医療～リハビリテーションを中心に」とのタイトルでお話をいただきました。重症心身障害児（者）の多くに見られる痙縮に対する治療として、ボツリヌス療法と、バクロフェン髄注療法に関し具体的な治療方法やその結果についての説明がありました。その効果は個人差がありますが、側彎や股関節脱臼、呼吸の阻害やイレウスといった合併症が多くみられる重症心身障害児（者）の場合、身体の変形・拘縮が進行する前に治療を行うことの重要性について言及されました。最後に、スウェーデンの重症心身障害児（者）の生活実態を直接ご覧になった経験に基づいて、医療のみならず国民全体の福祉に対する意識が重要であるとのお話がありました。



続いて、佐藤秀郎先生より「重症心身障害児（者）医療の新たな展開」とのタイトルでご講演をいただきました。先生ご自身が社会福祉法人愛正会水方苑の診療部長でもあることから、重症心身障害児（者）に対する医療の考えと、それを具現化する病院・医療の展開として来年4月に完成予定の成育医療センターの構想とあわせてお話をいただきました。NICUの進歩に伴い、長期展望のもとで治療を行う必要のある重度の障害をもつ子どもが増えている中、慢性期の小児医療の課題として、家族全体を支えていく医療、バランスよく発達させる医療の展開が挙げられ、そのために必要なものとして医療機関同士のネットワークや、臓器別でなく全人的医療という視点、メディカルの育成等が挙げられました。現代の医療の問題として、心理的なペインのみならずスピリチュアルなペインに対応できていないものがあり、尊厳ある生き方を支える医療の在り方が必要という意見が挙げられました。そこで、成育医療センターでは、家族が思いを打ち明けられる場所や、職員自身もリフレッシュできる施設を目指しているというお話がありました。最後に、能力主義の視点の下、「障害が社会的リスクである」という社会を見直すことが真のバリアフリーではないかという視点も示されました。

フロアからも活発に質問や意見が挙げられ、大変有意義な時間となりました。（療育指導室 文責：庄司愛 写真：依田有紀子）

